

## 『精神 (MENTAL)』

2008年 / アメリカ・日本 / 想田和弘監督作品

### 精神科の患者の素顔を描いた ドキュメンタリー

会員 青木 護 (38期)

DVD 7/23 (金) 発売  
3,990円 (税込)  
©2008 Laboratory X, Inc.



「精神」は、外来の精神科クリニック「こらーる岡山」を舞台に、患者、医師、スタッフ、ホームヘルパー、ボランティアなどを描いたドキュメンタリー映画である。

モザイクをかけない患者の生の声のほか、医師による診察、古い民家を利用した畳敷きの待合室、食事サービスや牛乳配達を行う作業所などが描かれている。患者から撮影許可を得ることの困難は、想像に難くない。医師やスタッフと患者、想田監督と患者との信頼関係なくして、成り立ち得ない映画である。

「こらーる岡山」は1997年設立。代表の山本昌知医師は1936年生まれで、1969年から閉鎖病棟の鍵を開ける取り組みを始めた。「誰が鍵を閉めているのか」というテーマで、患者と看護者との共同の話し合いを毎週続け、お互いが関心と信頼を持ち合うなかで、閉鎖病棟の鍵を開けたという。

自らを語る患者の言葉は重く尊い。様々な体験により心の病をもつ患者たちは、豊かな人間性を持って

いるようにも見えた。本当に人間らしいのは、私たちではなく、彼ら彼女らなのかもしれない。

ある男性患者は、毎週訪れるヘルパーさんに料理を習い、生活力を身につけようと努力している。

自暴自棄になって泣き叫ぶ我が子の口を思わず塞いで死なせてしまったという女性患者は、「あなたはこれを一生背負っていかなければならない」と警察官に言われたことが、心に突き刺さっている。

哲学者のような詩人の男性患者が引用するマザーテレサの言葉が印象深い。

誰もが人から愛され、安心して生活できる居場所があること、それが平和であること……人に愛を与えることは、その人から愛を与えられることでもあること……

映画の中で、ときおり患者とスタッフの区別がつかなくなることもある。相互の信頼に基づく平等な人間関係が、そこにあるからかもしれない。

人間にとって、信頼関係に優る財産はない。